平成30年（2018）
阿づまの光
8月号・Augusto

大本東京本部
開設50周年

題字 出口直日
通巻第593号
発行 大本東京本部
東京宣教センター
センター長 猪子 恒
〒110-0008
東京都台東区池之端2-1-44
TEL 03-3821-3701
FAX 03-3821-5283
振替 00160-5-72625
URL http://oomoto-tokyo.com
Mail tokyohonbu@oomoto.or.jp

教主さまお作 灰釉茶盌 銘「瑞生」

【弥仙山金峰山土 月宮宝座松釉】

みなさまとともに仕える喜び

総務管理課 松田達子

東京本部に着任して、はや1年。大神様のご守護、信徒の皆さまからの励ましのお言葉をいただきながら、さまざまな体験をさせていただいています。

7月の東光苑月次祭では、仕舞「草紙洗」の奉納をさせていただきました。10月8日に行われる東京大本歌祭にちなんでの選曲です。「草紙洗」は、和歌を主題にした内容で、和歌を初めて詠まれた素盞嗚尊（すさのおのみこと）さまにもゆかりのある曲です。シテ（主人公）は小野小町で、宮中での歌合わせでの様子が展開され、最後は「素盞嗚尊の守り給へる神国なれば花の都の春も長閑（のどか）に和歌の道こそめでたけれ」と締めくくられます。

このたびの歌祭で、私は弓太鼓指導を仰せつかっています。歌祭に選抜された青年をはじめ、伶人や祭員の皆さまと無事にお仕えさせていただきたい、そう願いながら、月次祭の本番にむけてお稽古をさせていただきました。

奉納の当日、舞台に立ち、舞が進むにつれ、今までに感じたことのない緊張感と喜びに満ちていました。舞台から拝する信徒の皆さまのお姿は、まるで素盞嗚尊さまが治める清らかな世界にいらっしゃるかのようでした。まもなく迎える歌祭では、関東教区の皆さまとともにお仕えさせていただけるのだと、感謝に満たされ、あふれそうな涙を抑えながら舞わせていただきました。

大本歌祭の特徴は、皆さまのお気持ちを祝詞を通してではなく、献詠歌を言霊として神さまにお供えさせていただけることです。祭壇となる歌垣の中心には、素盞嗚尊さまの詠まれた八雲神歌を掲げ、その周囲を色紙に清書された皆さまのお歌で八重垣を作らせていただきます。

献詠歌の締め切りは8月20日。献詠歌を投じて、ふるって歌祭へご参加くださいませ。

今月の聖言

素盞嗚（すさのを）の神（かみ）の始（はじ）めし敷島（しきしま）の
歌（うた）は善言美詞（みやび）のはじめなりけり

出口王仁三郎聖師

王仁三郎と大本歌祭

～平和を祈る敷島の道～

歌祭は、日本民族の祖先が遠く上代に執り行っていた神事であり、芸能でもあり、両者の渾然一体となった民族的祭典です。出口王仁三郎聖師は中絶していた歌祭を古式の精神にのっとり復活再現。和歌を献じて世界平和の実現を誓う、大本歌祭を紹介します。

世界を平和に導く神事

昨年の瑞生大祭で、教主さまは大本歌祭について「ここ最近のただならぬ世界情勢を見ておりますと、聖師さまが先の世を見越して、国々の八重垣を取り払い、主の大神さまを中心に、世界の万民が大和合して、一つになり、みろくの世の型を出すこの歌祭を、世界を平和に導く神事として、私たち人類のためにお残しになられたものではないかと思うのでございます」とお示し下さいました。私はこのお言葉を『大本』誌で拝見させていただいた時、歌祭のステージがまた一つ上がったのではないかと思いました。

八雲神歌の意味

「八雲立つ出雲八重垣つまごみに八重垣つくるその八重垣を」

この和歌は古事記、日本書紀に出てきます。素盞嗚尊（すさのおのみこと）が八岐大蛇（やまたのおろち）を退治した時に歌われたものであり、古典の中で一番最初に出てくる和歌ということもあり、和歌の起源、芸術の起源といわれています。そして大本では歌祭の折、たくさんの献詠歌が並ぶ歌垣の中心にある柱の四面に「八雲の歌」を教主さまご染筆の短冊で掲げます。これをご神体としており『八雲神歌』と呼んでいます。

この歌の意味について、聖師さまは、「どこの国も、国々に垣をめぐらし、嫌な雲をただよわせているが、この垣を、この雲を取り払って、清々（すがすが）しい世界にしたい、という世の立替えを意味したもの。

もう一つは、主の神を斎（いつ）きまつり、神より来る真理と正義と平和を守る団体をもって八重垣を作り、主の御心を行う世界を建設しよう、という世界の立直しを意味したものであります」と示されています。

世界の救済を願う素盞嗚尊の「八雲の精神」は日本の国風（くにぶり）であり、世界を平和に導く神事「歌祭」として脈々と息づいているように思えます。

歌祭の復興

聖師さまは明治27年、23歳当時、京都府園部の南陽寺で国学者の岡田惟平（これひら）翁から歌祭の歴史や仕方を教わり「優美な国風である、この歌祭をぜひ復活させたい」と考えておられました。

昭和10年、映画『出口王仁三郎一代記』に自らご出演されたり、夏秋の両大祭で霊界物語『天祥地瑞』の神劇を実施したりと、芸術活動を柱とする明光運動が最盛期を迎えていた折の10月31日、亀岡本部の明光殿で初の大本歌祭を執行。そして翌11月17日には北陸別院（石川県）で地方初の歌祭、12月8日には島根別院と、立て続けに実施されています。

12月8日は第二次大本事件の勃発した日であり、島根署の警官、総勢280名が非常招集されました。就寝中の聖師さまが検挙された後、二代さまによって歌祭は実施されているのです。

聖師さまは、この国家からの第二次弾圧があることをご存知だったのではないかと思われる節があります。

実は、先の北陸別院の歌祭で天位の方に下附される「天巻」（和綴帳歌集）の最終ページに聖師さまは「八雲神歌」に続いて「いつかはらさむ万代を経て」と加筆しておられます。

弾圧があることが分かっていたからこそ、先の世の私たちに、あるいは未来のために、昭和10年当時、今、歌祭を復興し、残さなくてはとお考えになられ、弾圧の直前まで、毎月のように歌祭を実施されていたのではないでしょうか。

歌祭は、上古から各地で執り行われていた神事であり、芸能であります。そして平安から鎌倉の時代に編纂された藤原定家による小倉百人一首の歌垣以降中絶していた歌祭を復興されたと、示されています。

歌木簡の発見

現代の私たちはその当時を知ることは出来ませんが、正倉院からは宝物に着いた荷札の木簡が30数点、平城京南隅からは1万3千点、京都の二条大路からは11万点の木簡が発見されているそうです。

これらすべてに和歌が書かれているというわけではないのですが、平成20年には滋賀県甲賀市の紫香楽宮跡から、万葉集の「安積山の歌」と古今和歌集の「難波津の歌」が表と裏に書かれた木簡が発見されました。

木簡とは長さ7・9㎝と14㎝の2つに割れており、いずれも幅2・2㎝、厚さ1㎜の品物。最初はあまりに薄いため削りくずと見られていましたが、その後の調べで、両面に歌がかかれた約60㎝の、儀式や宴会で詠み上げるのに使った「歌木簡」が出てきました。

紫香楽宮は奈良時代の離宮として造営されたもので、木簡は744年から

～21世紀・生きがい講座～

椎野（しいの） 恭三（きょうぞう）（総務管理課長）

745年頃のものと推測されています。発見者の大阪市立大学の栄原永遠男教授は平成18年に大阪市中央区の難波宮跡から和歌と見られる万葉仮名が書かれた木簡が発見されて以来、歌を書くための歌木簡があったのではないかと考え、調べておられたそうです。

その他にも万葉集の歌が書かれた歌木簡が、奈良の飛鳥村でも出てきているそうです。まさに聖師さまが示された、上古から各地で歌祭が行われていた実証ではないでしょうか。

歌祭形式での平和の祈り

平成4年に完成した長生殿で翌年、世界宗教者の祈りとフォーラムが行われました。その時の平和の祈りは、歌祭形式で執行されました。ユダヤ教、キリスト教、イスラム、ロシア正教、仏教、ヒンズー教、道院、神道等の方々が歌垣に向かって四方から祈りを捧げられました。

それから少し時間が経った平成12年2月19日、綾部市とエルサレム市は「友好都市宣言」に調印。エルサレムは世界三大宗教のメッカであり、世界中の人が知っている歴史ある都市。一方、綾部市は日本人でも知らない方が多いくらいの地方都市。この二つの都市が友好都市になれたのは、先の歌祭形式の平和の祈りに参加していたユダヤ教のラビ、シュレーム・ゴレン氏の後押しが大きかったと言われています。

その後、調印式ののち、駐日パレスチナ代表部からの抗議等を乗り越え、中東和平プロジェクトが始まります。

各地で歌祭執行

教主さまが就任された平成13年以来、島根の出雲大社、徳島の瑞雲郷別院、青森の善知鳥（うとう）神社、岡山の熊山、石川の神聖苑、京都の金剛能楽堂等々で、さらに近年では大阪の住吉大社、奈良の橿原神宮、兵庫の高砂神社でそれぞれ歌祭が執行されました。

なかでも教主さまは平成17年、大本歌祭で「わが願ひエスペラントの歌まつり人類同胞（はらから）こぞりてエルサレムの野に」との歌を発表なさいました。これは教団にとって大きな目標であり、世界の平和、みろくの世への道しるべであると思います。

それに相応して綾部の長生殿や、ブラジルの大本伯光苑、ブラジリアでのエスペラントによる歌祭が執行されたりと、国際的な拡がりも見せています。

また京都の金剛能楽堂での歌祭では、イスラエル大使とパレスチナ代表の方々が握手をされました。10年前の東京本部での歌祭では、エジプト、ヨルダン、イスラエルの各大使、パレスチナ代表の方々が出席され、とても良い雰囲気でイスラエル大使とパレスチナ代表がハグをされるというサプライズもありました。

歌垣の前で平和の祈り

昨年の瑞生大祭前日に執行された歌祭では、歌祭の最後にシリアやヨルダン、モンゴル、台湾など海外の宗教者や大本にご縁のある方々が歌垣の前で『平和の祈り』を捧（ささ）げられました。

日本語訳ですが、仏教の方々は「私はすべての人が和合して暮らす世界を見たい。私はみんながお互いに尊敬しあう世界を見たい。私は貧困から抜け出した世界を見たい。私は愛に満ちた世界を見たい。私はみんなが自然を尊敬する世界を見たい。それが私の願い」と。キリスト教の方々は「私達は共に兄弟として暮らすためにこの世に産まれてきました。そして、もし私達が望むなら、約束された天国へと世界を変えることが出来るのです。だから、一緒に行動しましょう。私の人類兄弟達よ」と。道院の方々は「願わくば、世が平和で、民が豊かでありますように。願わくば、私が人々と等しく健康で幸せでありますように。願わくば、戦争が無くなり、安寧の日々を、天と共に寿ぐことができますように。願わくば、悟りを得て、また人を覚し衆生が彼岸に導かれますように」など、それぞれ平和のメッセージを唱えられました。

教主さまは「第1回から数えて68回、天恩郷で開催された大本歌祭の歴史の中でも、昨日の歌祭は今後、未来において、大きな意味があるのではないかと感じさせていただいております」とごあいさつ。歌祭における平和の祈りは、和歌の形式だけでなく、世界中のすべての人々を包み込み、多様性を受け入れる歌祭の新時代を予見させるものでした。

最後に東京大本歌祭が10月8日、東京本部能舞台で執行されます。この度はイスラエル、パレスチナ代表、ヨルダン、エジプトの各大使が、歌垣の前で平和の祈りを捧げられる予定です。

掲載文は、平成30年3月21日に航空会館（港区新橋）で開催した「21世紀・生きがい講座」講演録の要旨です。

東光苑月次祭

東光苑月次祭は7月8日、午前10時30分から、斎主・椎野恭三総務管理課長のもと執行され、297人が参拝した。

祭員は神奈川主会、少年祭員は東京主会の成田小巻さん、成田かさねさん、伶人は二絃の会関東支部、大本神諭拝読は嶋貫光喜福島主会長、添釜は東光庵にて高野社中が担当した。

祭典後、猪子恒東京宣教センター長があいさつに立ち、7月5日から6日にかけて日本列島各地を襲った記録的集中豪雨での、信徒宅や両聖地の被害状況などを報告。「大本では、みろくの世、光明世界が到来すると教えられている。地震や水害など大きな災害は、我々が乗り越えなければならない大峠ではないか。10月の東京大本歌祭では、関東教区の全信徒が平和を祈り、願いを込めた短歌を献詠させていただきたい」と述べた。

引き続き、シテ・松田達子総務管理課員による金剛流仕舞「草紙洗」の奉納があり、直会に移った。

本部職員による金剛流仕舞「草紙洗」の奉納

21世紀・生きがい講座

第184回「21世紀・生きがい講座」は、6月20日午後7時から、港区新橋の航空会館で開催され、鬼塚義彰・大本本部総務課主事が「モンゴルを目指した王仁三郎の夢～光り輝くアジアの世紀を目指して～」と題して講話した。参加者は25人（内、一般7人）。

はじめにモンゴル国の成り立ちや気候風土、現在の国内情勢などをモンゴル駐在時の体験談などを交えて紹介。また、王仁三郎聖師がモンゴルへ入蒙した大正13年当時の国内情勢や、渡航に際しての聖師の思いなど、当時の資料から解説した。

講師は、「聖師は、国境も宗教も人種をも超えて、世界平和の礎を、その型を、アジアから築きたかったのではないか」として、入蒙といわれる126日間に及ぶ聖師のモンゴル行を偲んだ。

参加者からは「入蒙はエルサレムを目指した世界平和への道であったことがよく理解できた」（男性・信徒）、「大本とモンゴルの特別な深いつながりがよく感じ取れた」（男性・一般）、等の声が寄せられた。

みなづきの集い

東京本部直属信徒と関東在住の信徒を対象とした研修会「みなづきの集い」～大本ゆかりの地ツアー～は、6月24日、東京宣教センターなどで開催され、20人が参加した。

本年は関東の〝大本ゆかりの地〟を、より広く知っていただこうと、現地研修を中心に開催。参加者は、講話「大本関東別院について」を受講後、大本横須賀分所へ移動し参拝。続いて同分所からほど近い、聖師さまが大正5年に参拝された走水神社を参拝した。

また横浜市の関東別院跡地では、大正14年頃から第二次大本事件まで、実際に別院が立っていた土地を訪れ現地研修。関東別院において『天祥地瑞』ご口述や昭和神聖会創立準備を精力的にされた聖師さまのご足跡を偲んだ。

最後に國學院大學博物館・特集展示「教派神道と皇典講究所・國學院大學」を訪問、聖師さま直筆の書軸「感謝祈願乃詞」などを観賞した。

参加者からは「講話で当時の歴史的背景などを学んだ上での現地研修で有意義だった」などの声が寄せられた。

～大本東京本部開設50周年記念～

東京大本歌祭　献詠歌　募集

10月8日に開催する
東京大本歌祭の献詠歌を募集します

※献詠歌投稿の詳細は「大本」誌6月～8月号をご参照ください

募集　6月20日（水）～8月20日（月）
投稿　1人3首まで
入花料　1、000円
選者　教主さま

東光苑祭典・行事予定

8月

7日（火）午前10時30分
開教126年　瑞生大祭遥拝祭

12日（日）午前10時30分
東光苑月次祭・市杵島姫命例祭

15日（水）午後7時～8時30分
21世紀生きがい講座（航空会館・新橋）
講題　農は国の大本
～お土の心に学ぶ～
講師　島本光久
（㈱酵素の世界社・代表取締役専務）

16日（木）夕拝時
神集祭遥拝（初日・旧7月6日）

22日（水）夕拝時
神集祭遥拝（最終日・旧7月12日）

9月

9日（日）午前10時30分
東光苑月次祭・長寿感謝祭・交通安全祈願祭・秋季合同慰霊祭

11日（火）午後7時
全国一斉世界平和祈願祭

15日（土）～17日（月）
東光苑秋季祭式講習会

19日（水）午後7時～8時30分
21世紀生きがい講座（航空会館・新橋）
講題　守りたい「日本の心」
～大本三代教主・出口直日が残したもの～
講師　成尾陽（大本本部愛善宣教部長）

23日（日・祝）午前10時30分
三代教主毎年祭（28年）

24日（月・振休）午後6時～
東光苑秋をめでる夕べ